



連哥延德抄

伊地知文庫
文庫20
173



文库 20
173



連哥二百約乃らりて



りてよりあらしき事ありては
いかに地ふをまて大事乃白
とたやと炎了人なりやと記の言
大事一付不午人炎とそあらふ或を
福也一又一の言しと梅一付也
乃そなり若能轉物即同如來と雖も
物なりやとふりし言とつハ叶物なり
神通佛意感應ありとあり
十神存ふまけ物なりとあり

とろはういほまの種あまふらふ事
竹しりく只付極種くたふし美
まふんきくわけふのあきとまふ
ふまひ極種ふりりと付り種り
會紙のやせまうくくは八雲沸杓
上のうきひくく下向かまふてすふ
下向まふくはくはくはくはくは
く下まふくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくは
ゆりこれまふた用の中取とふら
すくふくはくはくはくはくは

よくくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくは
系氣なまふりて付付くはくはくは
付付りてあまふて付付くはくはくは
又種まふりて付付くはくはくは
と系氣まふくはくはくはくはくは
系氣まふくはくはくはくはくは
又付まふくはくはくはくはくは
付付くはくはくはくはくはくは
付付くはくはくはくはくはくは

取合をなほらり侍りとも切様の筋
目いたふへうはるる先達庭御
侍り也管長とよそくせり侍り
おこりまゝくさくさいひまきまき也
花のしづくまあしつあま
といふ白り

月たつる早り垣の雪のあきりあ
ふれもあまのあらしあまの世も
遠山の雪はゆふのつゆも
はるまきの白くさくさく白く

侍りともさうまのあまの白くさく
いと侍り也今又人見付侍り
きと名付也さうまの風はくさく
侍り

ふす勢ふらん海舟の船はあ
あれれあまををあまの
海舟も難波の春のあまの
侍りともさうまのあまの
はるまきの白くさくさく

付作り也又三葉葉木風情と付作りへ
う波やよと侍らんまはるる志ありしや
そはうおとそと作り

深山乃唐よりあふまじりて
松の葉よとまはるる月かふすりあそ

とあつらん麓は里は木とあそ
とあつらん麓は里は木とあそ

乞ハ葉葉木の匂ハ三葉葉木と付らんを
あそこのなりそよ又三葉葉木の匂

と流るる水作りと事しりて三句
ね似作りへきんこのあつらん三葉葉木
遠里乃匂はるる麓は里は木とあそ

まはるる海はあつらん三葉葉木の唐
いそ入は月とあそ

橋乃いりりあそ

さうりあそ
は二句ハ前白くけりあそ
いひあつらん三葉葉木の匂

ひらきそ付のむしひらきそ成方と
ふやきそ付のむしひらきそ

ふらきそ 貞妻はきそとたり

あひひらきそ新捨るふ捨るはく

あひひらきそはらふら明の月

春の夜新たみしを舟音深く

はあひひらきそたよりもあくなきと付

付るそ付るそ又さそとそとあは

きそ文とそそそあし用とあは

そとらひらきそあはひらきそ

初ふの人計のそと

あはひらきそあはひらきそ

身とそそそあはひらきそ

使もあはひらきそ

玉章と箋のそとらき書也

付換つ句のそとらきと付るそ

たりと前後しひらきそ

余情あはひらきそは月やあは

まわしうのうれあうこと
恋のさのきうさじらうと侍の恋の
心とされ友人に成人の志のたはし
友人と志のあむらひもふ心也然に古
人と志のふいなるあまは悲也我がち
ふくれの志のちる事ありあはれ我
志のふとくむらうとふ心とふ
侍也 玉葉とこころふ書やりあは
使いもふ志と侍らうとふ侍金糸

心得るに振るれとふとふまじり
ちやり侍らうとふとふとふとふ
乃とく遠くはるにうらんとそふ
かあうとふとふとふとふとふとふ
の心と侍らう侍り

心物おきし船路乃波の音
さしあうやうのふふと雨の聲
さしあう木葉おたはのこねる
森の風ありあり明の月

是ハお白の初々文字をいけす急
まそいひさしゆりもさう一の付換
とゆり也

人ハ之月見の星もあつた

たぐりゆりのおれはうま

おのりよりあつたいふて

山をさすはゆりゆり

是ハお白の初々文字をいけす急

振えゆり

と田乃陰路とていふ

昔國ハ神の七代とていふ

あつた酒りゆりゆり

竹の葉とていふ宿からゆり

は付換の塔の人のいふ

は法とていふゆりゆり

は付換の塔の人のいふ

塵のうらみかき葉地りん
あし引乃山の嵐も秋もえ
あしきりくうりふもあつん
山の端乃お舞とさうり秋めり
そい又あむ少細たると遠空
付りて

おもてくうりくしとあつん

色はくき花田の葉地りん

はり池のはりくしとあつん

身よとくしとあつん初唐のあつ
そいあむ風扱りくうりあつ
きりくしとあつくうりあつ
付りて

えんやとねりあつ乃あつ

ふりたるの葉地りん

りへあつりくうりあつ
あつりくうりあつ乃あつ
はりあつりあつ

一句ハ流定一ハ流

桃園のすくすく花もさうりし

じや津乃梅いさやちりき

春いひて霞乃雲やすむん

あはれハ霧ふるきり原の丘

そハ待の對句だしの

松とやさうし雷かクア書

友をえとおかふこの花道し

志のあつふもしたるの程

小松さくかあ新くの草くれ

そいさああさ付横火ゆり

南阿まねたうゆねにさくふ度

越えゆり志えよこれなま

難うゆりや

誰とさうしを結集

世中ハ流定一ハ流

あはれ風さし、軟乃さす

日とり孫ハあえすく山の月る

是ハ如クもい出らりて一句乃心も
まづ勝り也いれりてなまといふお句
付物ハ音曲付ヤし 又おてす山
月ハ存くさめりん也 光深氏字派
よこをて付り

卯辰年以下
まゝ

言おる人 法てくまり

卯川の岸ハあるまらわく舟
す流乃ちちの衣拭者も
斬ち花の匂り月深
は二百前ハ付あつたきこて付り

一きやんよく付てき妙なるなり
わく舟の岸ハさりておるなり
言おる人今ハし言流りな
中物ハ音下をわしと
又月花りておる杖も付す
侍人今ハのときぬの者も
地す存の音もハ付る
んあききや付ん

いんあきの音もハ付る

あつるをわくしきとらちかた

雷づらひし深谷のうら河のさきと谷のな

川は目式をいして其のさかたをあらわ

すうらんとするまきせゆるきをいふを

ゆるしつ著すり水のあらひ砂のさけ

つらふしむねゆるせば付様と年の中

しきあつるをわくしきとらちかた

右つこの付様は流しむねのま

しきあつるをわくしきとらちかた

はあまをわくしきとらちかた

あつるをわくしきとらちかた

押あつるをわくしきとらちかた

さぬあつるをわくしきとらちかた

様とふ別あつるをわくしきとらちかた

又いふは揚あつるをわくしきとらちかた

さぬあつるをわくしきとらちかた

しきあつるをわくしきとらちかた

印くくくく

此一冊者延徳之出應成
言命一經之悟亦之志也
然今之安富所就就道
年來朋友之親也
守之深也業下平子破
子明應五年二月十三日
義載

本書類本ニ連歌合集第二冊所収ノ佚名書、京大研究室本等有之
天理図書館本、浮花栲ハ本書ノ類本也 其奥書ニ

此一帖防州下向之時兼載門弟として大内
左京助政弘於彼旅宿一座興行之時京兆
發句に

跡つけよ庭の教の宿の雪

とありしに兼載協に

人めを今は冬草の花 と申されき

其後此一冊を書とるのへ注進之是は心敬より
兼載傳書なり余の門弟に不可有之此道の
秘説之由也門弟の外は不可有説見以起請文

可付受

昭和廿五年五月蓬左文庫存書寫了

（大正臣不朗筆）

